

発育発達専門領域

大澤清二（大妻女子大学副学長）

1. あらまし

<http://www.hatsuhatsu.com/>

■平成14年10月、日本体育学会発育発達専門分科会（現在、発育発達専門領域）を母体とした「日本発育発達学会」を発足。同年12月に、日本発育発達学会第1回大会を東京大学駒場キャンパスにおいて開催。現在会員数は953名（平成28年7月）。

■学術誌

1990—現在「発育発達研究」

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/hatsuhatsu/-char/ja/>

年5冊を発行。「子どもと発育発達」と合本。

1973—1989「発育発達専門分科会通信」

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/hatsuhatsu1973/-char/ja/>

■学会大会

年1回開催。本会は創設以来、様々な運営上の工夫をして参りましたが平成26年度より更に正会員の大会参加費を無料にすることになりました。

【平成28年度日本発育発達学会第15回大会】

開催期間：平成29年3月17日，18日。 開催場所：岐阜大学

■学会賞

学会大会において発表された研究課題の中から選出。

第14回大会においては、次のとおり。

最優秀研究賞 菅原知昭（新潟大学大学院）

低・中強度の運動遊びと認知機能の関係～児童が行う10分間の集団での長縄跳びの可能性～

優秀研究賞 田中千晶（桜美林大学）

小学生の学期中と夏休みにおける体重および座位行動・身体活動量の変化に関する変動要因

■編集事務局

株式会社杏林書院（文京区湯島4-2-1 03-3811-4887）

■学会事務局

大妻女子大学人間生活文化研究所内（千代田区三番町12 090-3516-6090）

2. 内外の研究動向

■ ～日本人の体格の最新研究動向～ 日本人の体格は明治期以来非常に大きくなった。その主たる時期は思春期の大型化にあると考えられてきた。しかし最近の研究によると大型化は思春期に起きたのではなく、乳幼児期であったことが明らかになっている。しかも乳幼児期の発育量と学齢期の発育量はほぼ完全に逆相関していることが示されている。

■ 従来日本人の体格に関する基本データは国が作成して公表する学校保健統計調査報告書である。この統計を発育学研究者が多角的に解析してきた。その結果として日本人の体格は明治期以来、ことに戦後急激に大型化した。同期して思春期の早期化が起きており、この影響が主として働いて大型化につながったと考えられてきた。この解釈は発育学関係の教科書や文献には繰り返し掲載されており、広く知られてきた。しかしこの解釈はデータの読み間違いから起きたものであった。

3. 科学的知見の応用の状況

■ 体力や運動能力の発達を考える上で体格の発育状況を把握することはその基本である。すなわち身長最大の発育時期が一つのメルクマールとなって体力や運動能力の発達を推定したり、評価したり、あるいはトレーニングの開始時期を考えたりするというのが一般的な理解の仕方である。また、学齢期に集中して大型化の原因となった発育期が存在するという偏った考え方は相対的にそれ以外の時期（乳幼児期）の発育と体力発達を重視しないことになってしまった。従って、今後は乳幼児期における体力科学的な研究が非常に注目されるのである。

4. 学校体育や大学体育に活かすべき最新知見

■ まずは教科書などの記述を書き直すこと、大学の授業などで学齢期に偏った説明を修正し、乳幼児期に焦点を当てた説明がなされるべきことがあげられる。

5. 若手研究者へのメッセージ

■ 研究を行うに当たって従来の学説を鵜呑みにしない態度が必要です。手柄を急ぐような軽率な論文作成は命取りになります。研究結果はいずれ誰かが必ず追試したり、再計算したり、検証するものです。また検証できるように論文を書くことが研究者としての基本です。反証可能性を担保するように論文を作成しましょう。

6. 引用文献

■ 大澤清二（2014）日本人の大型化は乳幼児期の発育によってもたらされた、
発育発達研究、63、1-5

（2016年7月20日執筆）